

啄木哀果とその時代

藤沢

啄木哀果とその時代

藤沢 全

桜楓社

藤沢 全 (ふじさわ まとし)

昭和12年1月北海道新十津川町に生まる。市立都留短期大学(都留文科大学前身)を経て昭和36年日本大学文理学部文学専攻(国文)卒業。近代日本文学専攻。昭和56年日米比較文学研究のため米国イリノイ大学に留学。
現在：日本大学助教授。

啄木哀果とその時代

昭和五十八年一月十五日 初版印刷
昭和五十八年一月二十五日 初版発行

定価 三九〇〇円

著者 藤沢 全

発行者 今井 肇

印刷所 岩村田活版所

101 東京都千代田区猿樂町二一八一—三

(株) 桜楓社

(電話) 〇三—二九五—八七七—

(振替) 東京 六一—一八〇二〇

序

日本大学助教授藤沢全氏まことしの『啄木哀果とその時代』は、同氏の十五年に及ぶ研究成果を一書にまとめたもので、文字通りの労作である。私の親しい友人の共立女子大学教授本林勝夫氏は、『別冊国文学・石川啄木必携』に寄せた「戦後啄木研究の歴史」の中で、藤沢氏の啄木研究にふれて「手堅い考証的研究」と評しているが、この言葉は藤沢氏の研究の方法なり本書の性格なりを適確に表現している。

藤沢全氏は石川啄木と土岐哀果の人と文学の特色と共通点を明らかにしつつ、その「啄木哀果時代」を証明するため、両者を結ぶ「樹木と果実」を資料的に解明しながら、それが大正時代の「生活と芸術」へ発展する過程を実証的に探り、さらに啄木と哀果を側面から支えた東雲堂時代の西村陽吉について詳しく言及しているが、この部分は本書の中でも出色のもので、困難な調査をくりかえしながら解明した画期的な業績である。

藤沢氏が志を抱いて北海道より日本大学三島高等学校に赴任したのは、二十六歳の昭和三十九年春のことである。同氏はすでに前任地の北海道美唄びばい工業高等学校時代に有島武郎の研究に着手し、「北海道文学研究」にその成果を発表していたが、日本大学三島学園に赴任してからは、石川啄木に関心を持ち、「詩集『あこがれ』をめぐる問題——その成立と書名について——」（国文学）昭45・10）、「啄木詩集の構想」（日本大学「語文」昭46・3）など、地道な仕事ではあるが着々と近代文学研究者としての地位を築いていった。これは一つには日本大学三島学園に世阿弥研究の西一祥氏や、斎藤茂吉研究の藤岡武雄氏らの良き先輩がおり、活発な研究活動を展開していたので、これに刺激され啓発された結果ともいえる。

また藤沢氏は私が編集と校正を担当した筑摩書房版『啄木全集』全八巻（昭42・6、昭43・4）と、『石川啄木全集』全八巻（昭53・4、昭55・3）の協力者として心血を注いで全集の仕事を推進された。特に同氏の新全集に果した役割は大きいが、第八巻に収めた私と共編の啄木の「戦後研究文献目録」はその成果の一つでもある。

私がこの筑摩書房の二度にわたる啄木全集の編集に参画したのは、文芸評論家の小田切秀雄氏の推挽によるものであるが、啄木全集の準備と刊行に携わった昭和四十年代から昭和五十年代にかけての十五年間は、私の人生でも最も多彩な活気に満ちた時代であったが、今にして思えば藤沢全氏の実証的な近代文学者としての性格もこの期間に形成されたように思う。

それにしても多年生活を共にし、苦楽をわかちあって同じ学問の道を歩んで来た藤沢氏が、半歳にわたるアメリカ留学を終えて帰国した機会に、従来の石川啄木や土岐哀果の研究をまとめ、また新たに開拓した西村陽吉の研究を加えてこの書をなしたことは、友人の一人として喜びにたえない。

私はながい啄木研究の歴史にこの手堅い実証的な研究の加わったことを近代文学の学界のために歓迎すると同時に、著者がこの労作の出版を機会にいつそう精進されて学者として大成されんことを心より希い、まさにしかあれと祈る。

一九八三年一月十日

岩 城 之 徳

啄木哀果とその時代

目次

I 石川啄木とその時代

一 詩集『あこがれ』とその時代.....九

1 『あこがれ』の内容と特色.....一〇

2 『あこがれ』の成立過程.....三

3 書名の変更——「沈める鐘」から「あこがれ」へ.....三

4 『あこがれ』時代の啄木——福場幸一との交遊を中心に.....三

二 歌集『一握の砂』の成立.....四〇

1 『一握の砂』の原型について.....四〇

2 『仕事の後』から『一握の砂』へ.....四七

3 『一握の砂』をめぐる問題.....五五

4 『一握の砂』所収歌の異説について——「やはらかに柳あをめる」を中心に.....六

三 歌集『悲しき玩具』の形成.....三

1 『悲しき玩具』の内容と特色.....三

2 『悲しき玩具』の形成.....六

3 第二歌集の出版計画.....七

4 『悲しき玩具』の初出について.....八

四	詩集「呼子と口笛」への道.....	六
---	-------------------	---

1	詩稿ノート「EBB AND FLOW」について.....	六
2	詩稿ノート「天の旅」から『あこがれ』へ.....	七
3	詩集「新弦」と劇詩「死の勝利」の構想.....	九
4	詩稿ノート「黄草集」の作成.....	九
5	詩稿ノート「ハコダテの歌」の作成.....	一〇
6	詩稿ノート「あこがれ以後」の作成.....	一〇
7	詩稿ノート「はてしなき議論の後」から「呼子と口笛」へ.....	一五

Ⅱ 土岐哀果とその時代

一	雑誌「樹木と果実」をめぐる二つの資料.....	二
---	-------------------------	---

1	「樹木と果実」の計画.....	二
2	「樹木と果実」發送原簿.....	二
3	「樹木と果実」出納簿.....	三
4	二つの資料の意義.....	七
二	雑誌「生活と芸術」への発展.....	三

1	「生活と芸術」の発刊計画.....	三
2	「生活と芸術」の発刊.....	四

3	「生活と芸術」創刊時の反響……………	一四六
---	--------------------	-----

4	「生活と芸術」の活動内容……………	一四九
---	-------------------	-----

三	歴史の中の生活者……………	一五〇
---	---------------	-----

1	善曆の死——その評価の視点——……………	一五五
---	----------------------	-----

2	啄木との提携——「樹木と果実」の挫折——……………	一五七
---	---------------------------	-----

3	『黄昏に』第二章「その前後」の意味……………	一六四
---	------------------------	-----

4	歴史の中の生活者——啄木との脈絡の中で——……………	一七二
---	----------------------------	-----

四	筆名考……………	一七七
---	----------	-----

Ⅲ 西村陽吉と東雲堂時代

一	両親の系譜と陽吉の生い立ち……………	一八五
---	--------------------	-----

1	西村家の家系……………	一八五
---	-------------	-----

2	江原家の家系……………	一八六
---	-------------	-----

3	陽吉の誕生……………	一八九
---	------------	-----

4	幼少時代……………	一九三
---	-----------	-----

二	小学校時代……………	一九五
---	------------	-----

1	市立代用刀根小学校時代……………	一九五
---	------------------	-----

2	市立錦華尋常高等小学校高等科時代……………	一九九
---	-----------------------	-----

三 東雲堂書店時代……………二〇四

- 1 丁稚奉公入り……………二〇四
- 2 西村家への入籍……………二〇六
- 3 文学へのいざない——読書と投書活動……………二〇八
- 4 自己確立——自覚・鍛練・恋愛など……………二一一
- 5 経営への参画——文学書の刊行……………二二三
- 6 趣味と実益の間——文芸雑誌の発刊……………二三〇
- 7 散文から短歌へ——多彩な文学活動……………二三三
- 8 処女歌集『都市居住者』の刊行……………二三九
- 9 その後……………二四五

付 録

- 1 石川啄木研究雑誌「呼子と口笛」総目次……………二五二
- 2 土岐善麿「編輯室」全文……………二〇〇
- 3 西村陽吉直筆「略歴」メモ……………二〇四
- あとがき……………二一〇

I

石川啄木とその時代

一 詩集『あこがれ』とその時代

文壇へのデビューはいつの時代でも容易なことではない。少年天才詩人とうたわれた啄木においても例外ではなく、それは危うくして厳しいものであった。

彼は家族の期待とはうらはらに、しかと自己を社会的に帰属させ得ず、ために「家」の足枷あしづなの中でアイデンティティに苦慮し、かつは青春の存亡を一筋の光明——文学の世界に賭けねばならなかった。この試練を支えたのがとりわけ西欧詩を滋養とする詩業で、清冽奔放たる処女詩集『あこがれ』は、その輝かしい成果にはかならない。時に二十歳。かくて啄木はこの一巻によってひとまず勢いづき、明治三十八年代後半の詩壇にさっそうと地歩を進めたことは夙に知られているところである。

今日、この『あこがれ』の研究は必ずしも盛況とはいえないが、これが初期啄木文学の中核をなし、特色づけていることは明白である以上、さらに徹底した研究が望まれる所以である。

そこで本章では、この詩集に新しい視角を設定するという意味で、全体的内容と特色を明らかにした上で詩集の成立過程を探り、さらに書名が「沈める鐘」から「あこがれ」へと変遷した事情を考察し、あわせてこの詩集時代の啄木の動向についても明瞭にしておきたい。

1 『あこがれ』の内容と特色

周知のように『あこがれ』は、明治三十八年五月一日に印刷され、その二日後に東京市京橋区南大工町五番地の小田島書房より出版された。四六判、本文二百八十六ページ、巻頭に上田敏の「啄木」と題した序詩四ページ、巻末に与謝野鉄幹の「跋」四ページを収め、扉には「此書を尾崎行雄氏に献じ併て遙に故郷の山河に捧ぐ」との献辞を収録。装幀は啄木と同郷の石掛友造で、カバーが付き、カバーの題字の上部には、「新体詩集」の四文字が縦二行にわたって記載されている。ちなみに、発行者は小田島嘉兵衛、小田島尚三（ともに京橋区南大工町五番地）、印刷者は石川金太郎（京橋区西紺屋町二六七番地）、印刷所は株式会社秀英社（同上）で、定価は五十銭。初版と再版を合わせて一千部印刷されたという。

収録作品数は長短合わせて七十七篇。このうち未発表の作品数は三篇で、残りの七十四篇はすべて各種の雑誌に掲載されている。その内訳は、「明星」二十九篇、「時代思潮」二十二篇、「白百合」十一篇、「太陽」六篇、「帝国文学」三篇、「はがき新誌」二篇、「曉声」一篇で、いずれも詩集への採録にあたって推敲されている。

詩型はすべて文語定型詩であるが、単に五音と七音の組み合わせにとどまらず、適宜四音と六音、五音と六音、七音と四音と五音などを相互に生かした多彩な組み合わせとなっており、その構成も一篇が一連五行、二連十四行、七連二十八行、五連三十六行などさまざまで、最も長篇は十四連百七十七行となっている。

ここに収められた七十七篇は、明治三十六年十一月上旬より明治三十八年三月十八日までの間に作られているが、この期間は啄木と堀合節子との積年の恋がみのり、晴れて婚約状態にもちこんだ得意の時代でもあったから、たと

えば次に掲げるソネットでも明らかのように、詩集をつらぬく抒情の基本は甘美なロマンチズムであることはいうまでもない。

人に捧ぐ

君が瞳ひとたび胸なる秘鏡の

ねむれる曇りを射しより、醒め出でたる、

瑠璃羽や、我が魂、日を夜を羽搏ちやまで、

雲渦ながるる天路の光をこそ

導きたる幻眩き愛の宮居。

あこがれ浄きを花露匂ふと見て、

二人し抱けば、地の事破壊のあとも

追ひ来し理想の影ぞとほゝあまるる。

こし方、運命の氷雨を凌ぎかねて、

詩歌の小笠に紅の緒むすびあへず、

愁ひの谷をしたどりて足悩みつれ、

峻しき生命の坂路も、君が愛の

炬火心にたよれば、黯き空に

雲間も星行く如くぞ安らかなる。

ここにも見られる和漢混淆する豊富な語彙や詩想の操作は、詩作時十九歳の啄木にしては卓抜ではあるが、こうした展開については蒲原有明や薄田泣菫などの影響を認めることができよう。それと共に西欧詩の影響も著しく、たとえば巻頭の序詩「沈める鐘」(明37・3・19作)についていえば、彼が英語の辞書を片手に独力で読んだドイツの詩人ウイリアム・ミュラー(Wilhelm Müller 1794~1827)の叙事詩「VINE^{注1}TA」(英訳は Samuel W. Duffield 1843~1880)の影響が顕著であり、同じく直前に完成した「曉鐘」「暮鐘」「夜の鐘」(いずれも同年3・17作)などにもその影響を指摘することができる。^{注2}

しかし、だからといって『あこがれ』が必ずしも独創を欠いているわけではない。たしかに前記の有明や泣菫などの先行詩人の詩業に触発されたり、西欧詩から着想上のヒントや素材などを積極的に得たりはしたが、その一方で、オリジナルな展開を示している。たとえば前掲の作品にも認められる四四四六調や「錦木塚」(1・16~18作)の五六六調などは、まぎれもなく啄木の試作した新調である。ことに前者のリズムは、ソネットの形式に生かされて『あこがれ』の前半部に多用されているが(後半部は五七調とか七五調が目立つ)、これは詩人としての未来に夢を托す啄木にとって、実験的ではあるが、得意にして可能性を秘めたリズムであるとの認識によったものと思われる。

啄木が詩集出版のために上京したのは後述するように明治三十七年十月末であるが、この時点で完成していたのは序詩「沈める鐘」より「江上の曲」までの五十一篇。のこりの二十六篇は上京してからの作品であるが、詩想の上では、各種の素材を用いて恋愛の勝利感や夢想的なもの、もしくは超然的なものへの宗教的憧憬といったものが中心にうたわれる上京前の作品と、ドラマティックな人生に眼を向けだす上京後の作品との間には、明らかに雰囲気